

電 話

草野理恵子

電話が来るのです 時々
ただ息をする音と波の音だけが
聞こえるのです
どこかで生きているような気がするのです
あなたがどこかで生きているから
私は生きないでいられる
あなたは流れている？
私はじっとしている
じっと待ち続けている

予感していた通り何かに変身する
天も地もなく目の奥に集結する風景
逝ってしまった者へ鳴り続ける鐘も
打ち続けられたまま何処かへ流れる
今は おびたしい虫や鳥の影が包む

鳴っていました 電話の奥で
私の耳鳴りでしょうか？
あの時と同じように鐘の音が・・・
ジェノサイド という本があります
今 売れている？
読んではいないので
新聞の広告で見ただけですから
ただその言葉にはっとして・・・
人間によるジェノサイドもありますが
これは何によるジェノサイドなのでしょうかね？
金子みすずの詩にもありました
大漁のいわし？サンマ？の話
至る所にありますね
タイリョウサツリク

枝々に火が放たれる
死んだ魚の瞳と同じ色に所々光る
死魚となって漆の椀と共に流れる
椀の表面は冷たく手がかじかむ
季節は正しく流れ春から夏に変わる
かじかんだ掌は汗にまみれ
泥だらけの椀の中に虫がたまる
たゆとう死魚の腹から生まれる虫たちが
今 飛び交う

私はね
この虫もあの子から生まれたような気がして
つぶせないんですよ
電話がね 来るんですよ
息の音
そう文字通り虫の息の音がするんです
じっとしていれば時間が過ぎ
私の人間という一生の仕事も終わります
画面の向こうで老女がつぶやいていた

今また 夏から秋へ
秋から冬へ
冬からまだ寒い いつまでも寒い三月へ
いつまでも寒くていい
誰にも三月はいつまでも寒くても・・・

2台の幼稚園バス 平石 裕一

長い揺れが収まったのを見定めて
高台から2台のバスが
港のみとおせる街へおり始めた
3月11日午後3時10分すぎ
親元へ幼子を送り届けようと

1台は順調に十数人の園児を乗せ
1台はあわてた子どもたちが忘れ物をしたため
数分遅れて後を追った
その時津波警報が鳴った
坂道は高台への車と人でごった返し
遅れたバスは
子どもを親元へ帰すのをあきらめて引返した
さきの1台が親のいる街に降りた時
フロントガラスへ猛然と押し寄せる怒濤があった

波はガラスを突破り
爆風のように 後窓を破り坂を駆け上がり
子どもらはくるくると回転しながら
窓の外にふっとばされた
そして坂の途中で怒濤は
急に引き揚げはじめ港へ戻っていった
子どもらを石ころのように転がし連れ去った

翌朝 身一つになった母親は
明けるのももどかしく高台へきてみた
バスはあったがいつものではなかった
子どものバスではなかった
子ども達の中にはわが子はいなかった
あのバスは港近くに
仰向けにひっくり返っていた
バスの中はからっぽ
瓦礫が土砂が天井につもっていた

わが子はいなかった
バスの窓という窓は大きく破れていて
子どもは車内にいなかった
エプロンの裾も
紐付きの帽子も
手提げも なかった
瓦礫だけだった

母親はそれから
あのバスと周りを 探し回った
子どもの手が足が見つからないかと
次の日も次の日も
また次の日も朝から夜まで探し続けた

探しても探しても見つからなかった
母親は小さなシャベルで
瓦礫を掻いた
朝から昼へ 昼から晩へ
小さなシャベルはひん曲がった

そしてグシャグシャの土の中から
小さな見覚えのある上履きがあった
そしてあの折れたクレヨン入れが出てきた
子どもの身体は見つからなかった

母親の泥まみれの手が
これらのものを何遍もなぜている
何遍も何遍も なぜている
そして みると港の方に海は青く広がり
子どもの代わりに草がめばえ
地球は静かな昼下がりであった

お地蔵さん

志田 徳子

この村を出て行くバスが来る前に
あなたの悲しい姿が招く
わたしは優しい気持ちになって
あなたの前に屈み込む
あなたはポツリポツリと話し出し
わたしは行くなと言いました

この前掛けは金太郎に借りてきた
この菅笠は村のじさまが被せてくれた
今年の冬は過酷で辛くて苦しくて
息を潜めて春を待ち
雪に埋もれて泣きました
苦悩の波は血の涙 暴風雪を忘れません

村の全てが雪の中 一寸先が見えなくて
逃げることさえできません
冬の魔王の暴れどき
逃げることなどできません
「辛抱」と風化の言葉を引き出して
障子紙に墨で書く

豪雨が山を崩してしまい
地震が田畑を駄目にした
揺れる余震を嘲笑い 毎日毎日雪は降る
村人達は疲れ果て 心も身体もへトヘトで
「頑張る」と書いた言葉は消しました

お地蔵さん あなたが行くなと言うならば
あなたの頭に水をかけ
あなたの周りをきれいにはいて
春のお花をあげましょう
わたしは出て行くバスには乗りません

畜 生

栗木 宏美

美しい若い彼女ではなく
何故こんな私が生き残ったのか
働き盛りの彼ではなく
何故この私が生き残らなければならなかったのだろうか

自然は私を食い物にすらしたくなかったというのか
私の身体は死さえも受け入れられないというのか

生きていて良かった
そんな一時の感情で ものを言うのはやめてくれ
木片一つも片付けられない
一人で歩くこともできない
足りないと言ってる薬を
請いながら飲まなければならない
そんな私が何故生きていて良かったのか

そのくせ一人ぶんの食糧は配られる
何もしない私が腹など減るはずがない
私の分は子どもに上げてくれと叫びながら
腹の虫がなる
にぎりめしを見ればつばが出てくる
救いようのない畜生だ

今日もテレビでは
日本は素晴らしい国 弱者を優先すると
賞賛のニュースが流れている
「感謝します」「感謝します」
繰り返す言葉とは裏腹に
私の心臓はえぐり取られていく

そんな中で 命をまっとうすることこそ
今私に与えられた唯一の罪滅ぼしなのだ